

# ギュンター・ツァイナーの印刷語の成果

— 15 世紀のアウクスブルクの印刷語の研究

藤 井 明 彦

## 0. 研究の目的

〈15 世紀のアウクスブルク市の印刷語〉は一つの標準語的モデルとして同時代の人々から賞賛され、またドイツ語史研究においても早くからその研究の重要性が説かれていた。それにもかかわらず、未だにその精確な様子が明らかにされていないのは、同一都市内でも印刷工房による差異があること、同一印刷工房内でも刊本による差異が、また同一刊本内でもその部分による差異が存在することを顧みない、性急な一般化のためと考えられる。本研究はアウクスブルクの最初の印刷業者であるギュンター・ツァイナー (Günther Zainer, †1478) の工房に密着し、1471 年から 1478 年のあいだに刊行された 18 点のドイツ語刊本の書記法を、印刷本作成時の基本単位であった〈折丁〉ごとに分析し検討する。この結果を、アウクスブルクで同時期に制作された手書き写本の書記法と比較し、活版印刷メディアが登場して間もない頃の言語様相の一端を明らかにすることを、本論文は目的としている。

## I. 序論

序論ではまず先行研究を検討する (以下主要なもののみ言及、カッコ内は当該著作・論文の発表年)。カール・フォン・バーダー (1890 年) は、南部ドイツ地域の印刷語が統一ドイツ文章語の形成に果たした役割に注目し、なかでも当時最も生産的であったアウクスブルク市の印刷語研究の重要性を指摘した最初の研究者の 1 人であるが、概ね的確な全体像の叙述に比べて細部の記述は乏しく不正確な点も多い。フリードリヒ・カウフマン (1890 年) は個々の印刷工房を研究単位とすべきこと、またアウクスブルクのドイツ語聖書の伝統 (ルター以前の 17 点の印刷聖書のうち 9 点がアウクスブルク刊) を強調した点で評価されるが、聖書のような大部の書物が一人の植字工によって制作されたはずのないことには一切言及していない。ロシア語原著 (1959 年) のドイツ語訳 (1969 年) が東独で出版されて広く知られるようになったミラ・グフマンの研究書は、当時の経済的・政治的中心地の一つであったアウクスブルクの印刷語に、超方言的な通用性を認知しようとする。それは、当時の印刷聖書の奥付にしばしば見られる「gemein なドイツ語に則って」という記述の gemein を「共通の」と解釈することに主に基づいているが、この脈絡での gemein は少なくとも 15 世紀においては「理解し易い、普通の」という意味でしかありえない。フーゴ・シュトッパ (1979 年) のプロジェクト「中世末期と近世初期のアウクスブルクの書き言葉

と印刷語<sup>1)</sup>によって、研究はようやく学問的に満足すべき水準に達するが、この、300年以上の期間を俯瞰しようとするプロジェクトに対して、一印刷工房に密着して活版印刷の最初期の様子を描き出すことが本論の主旨である。

調査すべき言語現象の選択は、まず当時の言語的揺れに関する証言と証拠に基づいて行った。具体的には、人文主義者ニクラス・フォン・ヴィーレが公文書の書記法の悪弊を批判しつつ一連の書記法規則について述べている文書(1478年)と人文主義者ハインリヒ・シュタインヘーヴェルの『人間生活の鑑』を刊行する際に、ギュンター・ツァイナーがその著者原稿に対して施した一連の改変である。上記の先行研究も参照し、また小コーパスを作成して試行した結果、以下の10の言語現象に関して調査を行うことにした:①初期新高ドイツ語複母音化の書記的反映(中高ドイツ語の音素 /i/, /û/, /ü/ と古高ドイツ語の音素 /iu/ の書記体)、②初期新高ドイツ語複母音開口化の書記的反映(中高ドイツ語音素 /ei/, /ou/, /öu/, /eu/ の書記体)、③中高ドイツ語音素 /b/ の語頭における書記体 (*b* あるいは *p*)、④新高ドイツ語 'gehen', 'stehen' の語幹綴の書記体 (/a/ タイプあるいは /ê/ タイプ)、⑤中高ドイツ語 'haben' の縮約形(不定形 *han* など)の使用の有無、⑥シュヴァーベン方言複母音の書記的反映(中高ドイツ語音素 /a/ に対する *au* ないし *ä*)、⑦接尾辞 '-igkeit' における 'g' の有無、⑧語中・語末で通例 *ck* として現れる書記体 *k* が *c* を伴わずに出現する頻度、⑨接続詞 'und' が *n* を重ねて実現される頻度 (*vnnd*, *vnnt* など)、⑩子音の前の /f/ に対して *f* でなく *v* が使用される頻度。このうち特に①、②、④、⑤は中世のドイツ語から近世のドイツ語への移行を語る際に欠かすことのできない重要な指標でもある。

## II. ギュンター・ツァイナー工房の刊行本

第2章ではギュンター・ツァイナー工房の18点の刊本を年代順に、上記の10の言語現象に照らして分析する。刊本の書誌学的情報および内容は以下のとおり。

1) 『小祈禱書』1471年刊。八折判。200葉。折丁: [a<sup>a</sup>-B<sup>a</sup>]<sup>2)</sup>。ミサや聖務日課時に唱える祈り、聖歌などを集めた小型判の本。冒頭のカレンダー部分でアウクスブルクの聖ウルリヒ&アフラ教会の祝日が赤字で印刷されているところから、使用範囲は地域的にかなり限定されていたものと思われる。

2) 『アポロニウス(テュルスの王アポロニウスの物語)』1471年刊。二折判。32葉。折丁: [a<sup>a</sup>-d<sup>a</sup>]。若き王アポロニウスの古代世界を舞台にした冒険譚。作者不詳のラテン語の散文物語をシュタインヘーヴェルがドイツ語に訳したもの。

3) 『グリゼルデイス』1471年刊。二折判。10葉。折丁: [a<sup>a</sup>]。『デカメロン』の最終日最終話。辛抱強い名婦グリゼルデイスの物語。ペトラルカのラテン語への翻案をシュタインヘーヴェルがドイツ語に訳したもの。

1) このプロジェクトは現在は事実上停止している。

2) 折丁は、第1折丁 = a, 第2折丁 = b のように、いわゆる〈折丁アルファベット〉で表示される(j, u, w は使用しない)。a<sup>a</sup> は第1折丁が8葉(16頁)から成ることを示す。

4)『聖人たちの生涯(夏の部)』1472年刊。二折判。211葉。折丁:[a<sup>10</sup> b<sup>8</sup> c<sup>10</sup> d<sup>8+1</sup> e<sup>10</sup> f<sup>8+1</sup> g<sup>10</sup> h<sup>6+1</sup> i<sup>10</sup> k<sup>6</sup> l-s<sup>10,8</sup> t<sup>10</sup> v<sup>8+1</sup> x<sup>10</sup> y<sup>6+1</sup> z<sup>10</sup> A<sup>42</sup>]。『黄金伝説』のドイツ語版。200点前後の手写本と40点以上の印刷本が確認されているが、ツァイナー版が初印刷版。「夏の部」には聖アンブロジオ(4月4日)から聖ヴェンデル(9月28日)までが収められている。

5)『ベリアル裁判』1472年6月26日刊。二折判。90葉。折丁:[a<sup>10</sup>-i<sup>10</sup>]。教会法学者テラモのヤコブスのラテン語著作のドイツ語訳。イエス・キリストによる人類の救済は違法だと訴え出た悪魔の団とイエス側が法定で争う話。

6)『黄金遊戯』1472年8月1日刊。二折判。48葉。折丁:[a<sup>10</sup>-d<sup>10</sup> e<sup>8</sup>]。シュトラースブルクの司祭インゴルト師の説教集。遊戯・ゲームを美德と悪徳が争う場に見立てる。

7)『婚姻の書(男は妻を娶るべきや否や)』1472/73年頃刊。二折判。61葉。折丁:[a<sup>10</sup>-e<sup>10</sup> f<sup>1</sup>]。ニュルンベルクの人文主義者アルブレヒト・フォン・アイプの著作。初版は地元ニュルンベルクのアントン・コーベルガー工房が刊行。古人の言や事例を引きつつ婚姻に関するさまざまな問題点を挙げながらも、最後は結婚を勧めるという内容。

8)『プレナーリウム(ミサ全書)』1474年刊。二折判。342葉。折丁:[a<sup>12</sup> b<sup>10</sup>-o<sup>10</sup> p<sup>8</sup> q<sup>8</sup> r<sup>10</sup>-L<sup>10</sup> M<sup>1</sup>]元来はミサや聖務日課時に朗読されたり、あるいは説教の基礎とされる聖書の章句を集めた聖職者用の書だったが、それに注解を付したタイプのものが登場し、信心書として広く一般にも読まれるようになった。

9)『ドイツ語聖書』1475/76年頃刊。二折判。534葉。折丁:[a<sup>10</sup> b<sup>8</sup> c<sup>9</sup> d<sup>10</sup>-s<sup>10</sup> t<sup>10</sup> und l Karton v<sup>10</sup>-z<sup>10</sup> A<sup>10</sup>-S<sup>10</sup> T<sup>9</sup> V<sup>8</sup> X<sup>10</sup>-Z<sup>10</sup> aa<sup>10</sup>-hh<sup>10</sup>]。15世紀に刊行された印刷本のなかで最も巨大なものの一つ。1466年にストラースブルクのヨーハン・メンテルンの工房が刊行した最初の印刷版ドイツ語聖書を大幅に改訂したもの。

10)『人間生活の鑑』1475/76年頃刊。二折判。174葉。折丁:[a<sup>10</sup>-k<sup>10</sup> l<sup>8</sup> m<sup>10</sup>-q<sup>10</sup> r<sup>8</sup> s<sup>8</sup>]。サモラ司教ロドリゲスの、さまざまな階層や職業の人々(俗界は皇帝から羊飼いまで、聖界は教皇から寺男まで)の暮らしを描いたラテン語原著をシュタインヘーヴェルが独訳したもの。

11)『シュヴァーベン法鑑』1475/76年頃刊。二折判。164葉。折丁:[A<sup>10</sup>; a<sup>10</sup>-k<sup>10</sup> l<sup>14</sup> m<sup>10</sup> n<sup>8</sup> o<sup>8</sup> p<sup>6</sup> q<sup>8</sup>]。『ザクセン法鑑』は南部ドイツ地域でも手を加えられて受容されていたが、『シュヴァーベン法鑑』はその改訂作業の最終版。冒頭に項目別の詳細な目次が置かれている。

12)『ドイツ語聖書』1477年刊。三折判。上巻321葉、折丁:[a<sup>10</sup>-b<sup>10</sup>-c<sup>11</sup>-d<sup>10</sup>-z<sup>10</sup>-A<sup>10</sup>-I<sup>10</sup>];下巻332葉、折丁:[a<sup>10</sup>-z<sup>10</sup> A<sup>10</sup>-I<sup>10</sup> K<sup>6</sup> L<sup>6</sup>]。先に刊行した聖書を2巻に分けて、大きさやや小型にしたもの。

13)『チェス盤の書』1477年刊。二折判。40葉。折丁:[a<sup>10</sup>-d<sup>10</sup>]。イタリアのドミニコ会士チェッソーレのヤコブスのラテン語原典のドイツ語訳。チェス盤をこの世に、チェスゲームを人生になぞらえて、それぞれのチェス駒(=階層および身分)の処世法を説く。

14)『聖墳墓への道』1477年刊。四折判。116葉。折丁:[a<sup>10</sup>-c<sup>10</sup> d<sup>8</sup>-n<sup>8</sup> o<sup>8</sup>]。南西ドイツの小都ズートハイムの牧師ルードルフが14世紀半ばに著したラテン語の旅行記の独訳。近東各地の地勢や風物について述べているが、エルサレムの聖墳墓を含めて、既存の旅行見聞

記の記述を転用していることが多い。

15)『バルラームとヨザファット』1475～1478年の時期に刊行。二折判。98葉。折丁:[a<sup>10</sup>-i<sup>10</sup>k<sup>9</sup>]。インドの王子ヨザファットが父王に迫害されていたキリスト教徒の隠者バルラームと出会い、改宗する物語。

16)『罪人の鑑』1475～1478年の時期に刊行。四折判。126葉。折丁:[a<sup>8+1</sup>b<sup>8</sup>-p<sup>8</sup>q<sup>4+1</sup>]。14世紀末から数多く編纂された「告解心得書」の一つ。主に「七つの大罪」と「十戒」を説きながら自省を促し告解を勧める。

17)『イソップ(生涯と寓話)』1477/78年頃刊。二折判。167葉。折丁:[a<sup>10</sup>b<sup>10</sup>c<sup>8</sup>d<sup>6</sup>e<sup>10</sup>-q<sup>10</sup>r<sup>7</sup>s<sup>9</sup>]。初版はウルムのヨーハン・ツァイナー(ギュンターの兄弟)の工房からで、ラテン語とドイツ語の対訳仕様であったが、その後間もなくギュンターの工房から出たドイツ語版が、後の数多くの版の原型になった。15世紀に最も成功をおさめた書物の一つ。

18)『医学の書』1477/78年頃刊。二折判。104葉。折丁:[\*<sup>4</sup>a<sup>10</sup>-k<sup>10</sup>]。バイエルン生まれの医師オルトルフが13世紀の末に、ラテン語の医学書で得た知識を同僚の医師たちに体系的に伝えるために編んだ本だが、広く一般にも浸透して行った。

分析の結果、殆どすべての刊本内で植字工の交替が起こっており、またその交代が主に折丁と折丁の間で生じていることが確認された。また各折丁からは原則として最初の2頁と最後の1頁を抜粋したので、同一折丁内での書法の揺れも幾つかのケースで発見することができた。分析作業の例としてここでは『アポロニウス』と『イソップ』について要約して述べる。

『アポロニウス』は全32葉と分量が比較的少ないので全頁を調査したが、その書記法には3つの層が認められた。

表1: 書記法における3つの層(『アポロニウス』)<sup>3)</sup>

3	/i/ sonst mîn etc. /iu/	<i>M / D</i> <i>ei / i</i> <i>ú</i>	<i>D</i>	<i>D / M</i> <i>ei</i> <i>eu / ú</i>	<i>D</i>
2	/û/ /û/ /ou/	<i>v bzw. u</i> <i>ú</i> <i>o / ou</i>	<i>u</i> <i>eu / ú</i> <i>o</i>	<i>v bzw. u</i> <i>ú</i> <i>ou / o</i>	
1	/ei/ sonst ein, kein -heit, -keit /b/		<i>ai</i> <i>ai</i> <i>ai</i> <i>b</i>		
		<b>a</b>	<b>b</b>	<b>c</b>	<b>d</b>

3) 'mîn etc.' = 中高ドイツ語の所有代名詞・人称代名詞(2格)の mîn, dîn, sîn; '/i/ sonst' = それ以外の場合の音素 /i/; '/ei/ sonst' = 冠詞(ein, kein)と接尾辞(-heit, -keit)以外の場合の音素 /ei/; *M* = 単書記体 *i, j, x, y*; *D* = 複書記体 *ei, ey*。2番目に多く用いられる書記体の頻度が、最も多く用いられる書記体の頻度の1/2以上である場合は、記号 '/' で区切ってそれを示す。

第1層は基層とも言うべき部分で、全篇を通じて音素 /ei/ の書記体は *ai*, /b/ に対しては *b* と一貫している。第2層では折丁 **a**, **d** と **b**, **c** の書記法が対照的である。音素 /û/ は折丁 **a**, **d** では語頭で *v*, 語中で *u* として相補分布的に現れるが, **b**, **c** では一貫して *u* で実現される。音素 /û/ に対して複書記体 *eu* を用いるのも, /ou/ を専ら *o* で実現するのも **b**, **c** の特徴である。特に音素 /û/ に対する振る舞いの差が顕著であることから, 二つの折丁グループは別の植字工が担当したと考えられるが, **a** を担当した植字工が **d** で仕事を再開する際に, その間に植字された **b**, **c** の書記法に影響され, 結果として折丁 **a** が孤立した様相を示すことになるのが第3層である。これが最も顕著なのが 'min etc.' の書法 (**a** *i* 36x, *ei* 67x; **b** *i* 2x, *ei* 135x; **c** *i* 12x, *ei* 95x; **d** *i* 0x, *ei* 164x) で, 折丁 **a** では 1/3 以上の割合を占めていた単書記体 *i* は **d** では完全に姿を消している。音素 /i/ が現れるその他の場合 ('/i/ sonst') でも, 同じく **a** と **d** のあいだで単書記体の使用割合の減少 (52,7% → 21,6%) と複書記体の増加が認められる (47,4% → 72,5%)。このように, 言語的不均質は同じ都市内・同じ印刷工房内・同一刊本内だけではなく, 一人の植字工のなかでも生じることがある。またこの場合の〈植字工内差異〉は著者シュタインヘーヴェルの西シュヴァーベンの書法からの脱却も意味していた。<sup>4</sup>

ギンター・ツァイナー版の『イソップ』を眺めてまず気づくことは, 一定の部分でコロン [:] およびセミコロンを逆にした珍しい記号 [;] が使われていることである。一方それらを使用しない部分は, 下点 [.] と中点 [·], そして行末でハイフンとして使用されるヴィルゲル [/] のみで済ませている。これに [:] と [;] が加わる部分では, この追加記号が主に文中で (現代のコマに相当), 下点と中点が主に文末で (現代のプンクトに相当) 使われることになる。文章記号のこの2種類の使用タイプもやはり基本的に折丁単位で交替している。

表2: 文章記号使用の2つのタイプ (『イソップ』)<sup>5</sup>

<b>a</b>	<b>b</b>	<b>c</b>	<b>d</b>	<b>e</b>	<b>f</b>	<b>g</b>	<b>h</b>	<b>i</b>	<b>k</b>	<b>l</b>	<b>m</b>	<b>n</b>	<b>o</b>	<b>p</b>	<b>q</b>	<b>r<sup>a</sup></b>	<b>r<sup>b</sup></b>	<b>s<sup>a</sup></b>	<b>s<sup>b</sup></b>
I	I	II	II	II	I	II	I	I	II	II	I	I	II	II	II	I	II	I	II

2ないし3折丁ごとに植字工が交替するのはツァイナー工房によく見られる分業パターンだが, 書記法からも, 折丁グループ I と II は別の植字工が担当していたことが判る。この, 工房の殆ど最終期の刊本は, '/i/ sonst' を複書記体の *ei* か *ey* でしか表現しないが, 折丁グループ I では *ei* が 69,8% (173/248x), II では逆に *ey* が 70,4% (202/287x) を占めている。また新高ドイツ語の 'gehen', 'stehen' に該当する形として, I は主に *gon* / *lon* を, II は専ら *gan* / *lan* を使用する。更に接尾辞 '-igkeit' の実現においても対照的で, I が 28 例中 27 例で *g* を挿入している一方で, II は 29 例中 19 例で *g* を省いている。

4) アウクスブルク市は東シュヴァーベン方言地域の東端, バイエルン方言との干渉地域に位置する。

5) I = 下点, 中点, ヴィルゲルのみを使用; II = コロンと逆セミコロンも使用。r<sup>b</sup> = r<sup>a</sup>, 5'; r<sup>a</sup> = r のその他の部分; s<sup>b</sup> = s<sup>a</sup>, 5'; s<sup>a</sup> = s のその他の部分。

『イソップ』の最後の2つの折丁 **r** と **s** は、分業のパターンから推すと、折丁グループ I の植字工がすべて担当するのが自然に思える。ところがもう一人の植字工が **r4'**, **r5'**, **s2'**, **s5'** を担当していることは、文章記号の使い方と書記法で明らかだ。<sup>6</sup> 介入の動機は必ずしも明白ではないが、介入の個所は、当時の先進的な方法であった全紙単位の植字が行われていたことを推測させる。折丁 **r** は二つ折りにした3枚の全紙の外側に全紙の半分大の紙(半紙)が付加されていて、それが第1葉 (**r1**) となる。**r2**, **r3**, **r4** が折丁を束ねている糸の縫目の前、**r5**, **r6**, **r7** がその縫目以降、すなわち **r4'** と **r5'** は最も内部の全紙の内側で隣り合った頁になる。6葉、すなわち3枚の全紙からなる折丁 **s** では、**s2'** と **s5'** は第2全紙の内側で隣同士になっている。ほぼ同時期の刊本『医学の書』でも同様の方法で植字が行われた痕跡があるが、こうすれば従来は4回必要だった1枚の全紙のプレスが2回で済む利点がある。<sup>7</sup> 工房は1478年4月のツァイナーの死の直前に破産をしてしまうが、最終期においては、テキスト選択に関しても植字・印刷方法に関しても、また後に見るように書記法においても、経済性を優先していた状況が読み取れる。

### Ⅲ. 15世紀の第3四半世紀におけるアウクスブルクの手書き言葉

アウクスブルクでは活版印刷工房の登場以前も以後も〈手書き写本〉が数多く作製されていた。また初期の印刷工房も、写本として既に成功をおさめていたテキストを手がけることが多かった。アウクスブルクの最初の工房であるツァイナー工房の印刷語の輪郭づけのためには、同時期の手書き言葉との比較が欠かせない。

検討対象として、まず印刷本としてもしばしば刊行されたタイトルを選び、ミューリヒ兄弟、ボルシュタッター、ヘッツラーという多作だった書き手に重点を置きながら、1450年代から1470年代にかけて均等に資料が得られるように、以下の8点の写本を選択した。ゲオルク・ミューリヒ:『ベリアル裁判』(1454年)、『アレクサンダー大王の物語』(1455年、兄弟のヘクトルと共同製作); ヨハネス・ライダー:『二十四の黄金の堅琴』(1460年); ヨハネス・シャイフェリン:『聖人たちの生涯(夏の部)』(1461年); コンラート・ボルシュタッター:『グリゼルディス』(1468年)、『自然の書』(1474年); クララ・ヘッツラー:『聖人たちの生涯(夏の部)』(1470年以前)、『シュヴァーベン法鑑』(1472年以前)。これらの写本の最初・中ほど・最後の3箇所からそれぞれテキスト全体の約5%の分量を抜粋し、ツァイナー刊本の場合と同様に、上記の10の言語現象に関して調査をした。<sup>8</sup> 調査の結果はカール・ボーネンベルガーの『15世紀のシュヴァーベン方言の歴史について』(1892

6) 註5参照。r(ecto)は紙葉の表側を、v(erso)は裏側を指す。例えば **r4'** は、折丁 **r** の第4紙葉の裏側、頁で言えば8頁目に当たる。

7) 『イソップ』の折丁 **s** のような3枚の全紙から成る折丁を例にとれば、第1全紙は従来1<sup>1</sup>, 1<sup>2</sup>, 6<sup>1</sup>, 6<sup>2</sup> と1頁ずつ植字・印刷されていた。全紙単位の植字・印刷は生産の効率を高めたはずだが、1枚の全紙の片側を一挙に印刷することが可能なプレス機の導入という投資も必要とした。

8) 同一写本内部での書記法の変化は殆ど見られなかった。

年)<sup>9</sup>の記述と照らし合わせながらまとめたが、ここではツァイナーの印刷語との関係で重要な2点を要約しておく。

1) 初期新高ドイツ語複母音化の書記的反映(上記①)に関しては、2つの異なったタイプが認められる。ヘクトル・ミューリヒ、シャイフェリン、ボルシュタッターが /i/ を複書記体 *ey* ないし *ei* で表し、/û/, /Û/, /iu/ に対しても複書記体を使用している一方で、ライダーとヘッツラーは /i/ は *ei* で表現するものの、/û/, /Û/, /iu/ に関してはまだ単書記体を用いている(ゲオルク・ミューリヒは中間的)。この2つのタイプの書法は1450年代から1470年代まで均衡を保ちながら並存している。

2) その /i/, /û/, /Û/, /iu/ と中高ドイツ語の複母音 /ei/, /ou/, /öu/, /eu/ (上記②)の書記法に関しては、ヴァラエティーに富むボルシュタッターと禁欲的なヘッツラーが対照的。ボルシュタッターは /û/ を7種の、/ou/ を9種の、そして /iu/ は14種もの書記体で表現している。ヘッツラーは、調査した範囲で28回現れる /eu/ を一貫して *ä* で書き、また /ei/ に対しても、ボルシュタッターが *ai*, *ay*, *aj*, *ei*, *ey* と変異する一方で、*ai* と *ay* のみ、しかも97.6% (1274/1306x) *ai* を使用している。

#### IV. ギンター・ツァイナーの印刷本における個々の言語現象の実現

この章では、上記の10の言語現象を個別に取り上げ、その実現(書記法)が1471年～1478年の間にどのように変化していったかを、一方では第III章で行った手写本の分析結果と、他方では初期新高ドイツ語期の書記法研究のスタンダードワークであるヴィルギル・モーザーの『初期新高ドイツ語文法』(1929;1951)の記述と比較しながら検討した。その結果、8年間という比較的短い活動期間のうちにツァイナーが殆どすべての言語現象においてその実現法に改変を加えて行った様子が明らかになった。<sup>10</sup>

#### V. ギンター・ツァイナーの印刷語の成果

この章ではまとめとしてこれまでの書記法に関する調査・検討をもとに、ギンター・ツァイナー工房の歴史の再構成を試みる。

##### 1. 揺籃期(『小祈禱書』, 『アポロニウス』, 『グリゼルデイス』)

シュトラースブルクのメンテリンのもとで活版印刷術を学んでいたツァイナーをアウクスブルクに呼び寄せたのは、司教や僧院長といった有力な教会関係者だった可能性が高い。1468年に活動を開始した工房は、その求めに応ずるようにバルブスの『カトリコン(万能薬)』(ラテン語辞典・文典)やデュランティの『聖務論』(典礼教義書)のようなキリスト教会と聖職者のためのラテン語文献を刊行していた。最初のドイツ語刊本である『小祈禱書』にも市内の聖ウルリヒ&アフラ教会との強い関連が窺えるが、書法も /ei/ を *ai* で /ou/ を *au* で一貫して表現するなど、当時の市内の手書き言葉の習慣に基本的に従っている。た

9) 一定の評価を得ている著作だが、叙述対象が主に上記の①と②に限られており、叙述方法も厳密さを欠くところがあるので、筆者自身が調査を行った。

10) 字数制限の関係で、IV章の内容はV章の叙述に織り込んで述べる。

だし、手写本における複母音化の書法の2つのタイプに関しては、全面的に複書記体を導入すると同時に /i/ を *ei* で表記して 'mîn etc.' の書法と同化させる、といった形で両タイプの統合をはかっている。一方『アポロニウス』と『グリゼルデイス』では、ウルム在住の著者シュタインヘーヴェルとの確執がある。『アポロニウス』の最初の折丁は、/i/ や /iu/ に対して単書記体を多く使用し、複母音化の進んでいない西シュヴァーベン方言的な様相を示しているが、第2折丁からは複書記体が投入されている。『グリゼルデイス』でもこの修正路線は引き継がれたが、おそらくそれを快く思わなかったシュタインヘーヴェルは、2年後にウルムのヨーハン・ツァイナーの工房から、/i/ は *j* で /iu/ は *û* だという自分の流儀に沿った『グリゼルデイス』の刊本を、序言も寄せ、また自らの紋章も描かせた立派な意匠で出版することになる。

## 2. 最初の一步 (『聖人たちの生涯 (夏の部)』, 『ベリアル裁判』, 『黄金遊戯』, 『婚姻の書』)

1472年からツァイナーはテキスト選択においても刊本の言語仕様においても主導権を発揮する。最初に手がけたのは、写本として既に広く流布していた聖人伝説集で、これは工房にとって初の木版画入りの浩瀚な二折本でもあった。ここでツァイナーは複母音 /ei/ を、アウクスブルクの手書き言葉ともシュタインヘーヴェルの原稿とも、そしてそれまでの自らの印刷本とも異なって、例外なく *ei*, *ey* で植字する。アウクスブルクと並ぶ当時の文化的中心地ニュルンベルクの書法、あるいはシュトラースブルクのメンテリン工房の方法にヒントを得た可能性もあるが、ツァイナーが *ei*, *ey* を全面的に導入したのは、/ei/ に対して *ai*, *ay* を用いている限り /i/ の書記体と合同する可能性がなくなる、という書記体系上の顧慮からに他ならない。その一方で /ou/ を *ou* ではなく *au* とする書法は、これを採用すれば /û/ の書法と合流するにもかかわらず、本格的な導入はこの2年後になる。この時間差はおそらく音素の登場する頻度と関連するだろう。通例、音素 /i/, /ei/ を含む語は /û/, /ou/ を含む語の数倍多く現れる。例えば『黄金遊戯』の冒頭でその4つの音素を含む語は *feind*, *houbtfünd*, *ouch*, *feynd*, *maifterlich*, *bey*, *meiner*, *ein*, *beichtiger*, *ein*, *bey*, *geneigt*, *schreiben*, *heiligen*, *meiner*, *einē*, *geiftlichen*, *einer*, *ein*, *büchlin*, *teilen*, *houbttotfünd*, *scheibblachen*, *fraßhey*, *geitikeit*, *trakeit*, *feitenſpil*, *neid*, *ein*, *darauf*, *ouch*, *auß*, *auß*, *meinem*, *eigen*, *ouch*, *ein*, *heidnifcher*, *maifter*, *dreierley* ... の順で登場する。/i/ と /ei/ が *ei*, *ey* で実現されているために、書記体 *ou* と *au* の不整合が目につくかもしれないが、もし /ei/ が *ai*, *ay* で植字されていたら、次のような様相を呈していたことになる: *feind*, *houbtfünd*, *ouch*, *feynd*, *maifterlich*, *bey*, *meiner*, *ain*, *beichtiger*, *ain*, *bey*, *genaigt*, *schreiben*, *hailigen*, *meiner*, *ainē*, *gaiftlichen*, *ainer*, *ain*, *büchlin*, *tailen*, *houbttotfünd*, *scheibblachen*, *fraßhayt*, *geitikait*, *trakait*, *faitenſpil*, *neid*, *ain*, *darauf*, *ouch*, *auß*, *auß*, *meinem*, *aigen*, *ouch*, *ain*, *haidnifcher*, *maifter*, *dreierlay* ... この *ai*, *ay* 書法がもたらす視覚的に拡散した印象をツァイナーはまず版面から遠ざけたかったのだろう。

## 3. 第二歩, 第三歩 (『プレナーリウム』)

ツァイナー工房のプログラムで見逃してならないのは、〈全体性〉と〈聖性〉への志向である。それはライネリウス・デ・ピシスの『普遍神学』、ピサのバルトロマエウスの『良心問題大全』といった一連の盛期スコラ学の著作の刊行にも窺えるが、聖人暦に基づいて一



年間を巡る『聖人たちの生涯』、日毎読むべき福音書や書簡の章句を一年間にわたって配列した『プレナーリウム』、それに続く『聖書』（聖なる書の集成）の刊行といったドイツ語本の出版プログラムを支える志向でもある。『プレナーリウム』の冒頭には、祝福を与えるイエスの姿を描いた一頁大の木版画が聖画像のように置かれており、本文のテキストは祈りの言葉で始まる。この342葉の大部の書物を開くことは、神の家（教会）の扉を開くことに他ならない。

この刊本において初めて本格的に、*-ikeit*に替わる*-igkeit*（上記⑦）と*vnd*に替わる*vnn*d（上記⑨）が登場するが、共に一種の建築的な感覚に基づく美的配慮から投入されたものだろう。ツァイナー工房の1470年以降の殆どすべての刊本に使われている力強い「第2活字」は、水平方向への流れを感じさせる「第1活字」と異なり、垂直線を強調する。字体の基準線を越えて下に突き出た部分（Unterlänge）を持つ活字は基本的に‘g’、‘j’、‘p’、‘q’、‘y’の5種で、‘p’と‘q’が主にラテン語本で使用されることを考えると、‘g’はUnterlängeを持つ数少ない活字の一つである。すなわち、上に突き出た部分（Oberlänge）を持つ‘k’の前への‘g’の挿入は、活字の組み合わせによって語形に垂直的なバランスを作り出すという美的な機能も果たしていると言えるだろう。その一方で、‘n’を重ねられた*vnn*dは水平方向への拡がりを増す。この頻出単語の一つが‘n’の重畳によって重みを増すことにより、版面全体に一種の安定感が生じるのは、*vñ*のような省略形を多く用いた場合の印象と比べれば明らかだ。‘nn’の後に続く活字も、殆ど例外なく、視覚的に弱い‘y’ではなく下部の円形のエレメントが量感をもたらす‘d’である。

#### 4. モニュメント（『ドイツ語聖書（1475/76年頃）』）

ツァイナー工房の印刷本の判型は殆どすべて二折（フォリオ）であるが、数点の書籍は通常のフォリオ（組版面が200×120mm前後）より一回り大きい大フォリオ（280×170mm前後）で刊行されている。1476年の書籍広告でも、真っ先に『普遍神学』（993葉）、次にトマス・アクィナスの『黄金連鎖式教父聖書解釈集』（529葉）というように、まず大フォリオの刊本が、しかも葉数の多い順に並べられているところからも、印刷本の大きさ・厚さの持つ意味をツァイナーは十分に意識していたと思われる。そして『ドイツ語聖書（1475/76年頃）』は、大フォリオを上回る「最大フォリオ」（351×218mm）で仕上げられた。この視覚的に圧倒的な印象を与える印刷本では、‘*-igkeit*’が*g*を省略せずに現れる頻度も、*vnn*dが使われる回数も『プレナーリウム』を2～3倍上回っている。また、語中・語末で書記体*k*の前に*c*を挿入するやり方（上記⑧、*k*のOberlängeの前に空間を確保して見やすくする）も初めて本格的に導入された。

この聖書の奥付にある、従来の印刷聖書とは異なる「gemeinなドイツ語に則って」いるという記述のgemeinの意味に関しては、研究者のあいだで見解が定まっていない。ツァイナーの数少ないメタレベルでの発言だが、「共通の」とする解釈と「普通の」とする解釈が19世紀末から現代に至るまで並行している。ここでは、ツァイナーが主な比較対象としているメンテリン聖書（1466年）を詳しく検討することにより、1) メンテリンが‘esse’とDativのようなラテン語特有の構文（*et non erat illis filius*）を逐語訳している個所（*Vnd in waz nit suns*）



6. 「その印刷業者は落ちぶれて死んだ」(『聖墳墓への道』, 『罪人の鑑』, 『イソップ』, 『医学の書』)<sup>13</sup>

最終期のツァイナー工房は、それまでとは異なった様相を見せる。『聖墳墓への道』, 『罪人の鑑』のような小型の四折判(組版面が 140 × 85mm 前後)や多数の木版画(167 葉に 208 点)を搭載した『イソップ』の刊行を手がけ、また『イソップ』と『医学の書』では印刷の効率を高める全紙単位の植字も導入する。この経済性優先傾向は書記法にも現れ、『医学の書』ではこれまで一貫して *b* で表記してきた音素 /b/ を、主要な販売地域であるバイエルン方言地域の流儀に合わせるように突如 *p* 表記に切り替える。しかしこういった様々な手立ても及ばず、1478 年 4 月のツァイナーの死の直前にその工房は破産する。

最後に、論文全体の内容(問題設定と方法論、分析結果とその解釈)を要約し、本研究が他の印刷工房あるいは印刷都市研究のモデルになりうることを述べて、本文の最後の章である第 V 章は終わる。この後に VI. 付録, VII. 目録(略語・文献), VIII. 索引が続く。  
(アウクスブルク大学 文献学・歴史学部, 2004/2005 年度 博士学位論文。原題 Akihiko Fujii: Günther Zainers druckersprachliche Leistung – Untersuchungen zur Augsburger Druckersprache im 15. Jahrhundert)

13) 表題は当時のアウクスブルクの僧院長の年代記に記された詩の 1 節 (*Der pſchtrucker verdarb und starb*)。